

飼料原料の動向と今後の見通しについて

飼料単味課 氏家 太

今年4月発表の気象庁「エルニーニョ監視速報」によれば、「夏には5年ぶりのエルニーニョ現象が発生する可能性が高い」とされていた。

2014年の米国穀物の生育は順調に推移し、史上最高のビッグクロープとなる可能性もあることからシカゴ定期も大きく下落している。

「エルニーニョ現象＝米国穀物豊作・日本冷夏」の図式がインプットされ、いかにもエルニーニョ現象が発生しているかに思われているが、直近の同速報では、夏にはエルニーニョ現象が発生する可能性は低く、秋に発生する可能性が高いと修正されている。本稿執筆時点（7月下旬）ではエルニーニョ現象は発生していないということになり、どうりで猛暑が続くわけだと納得してしまう。

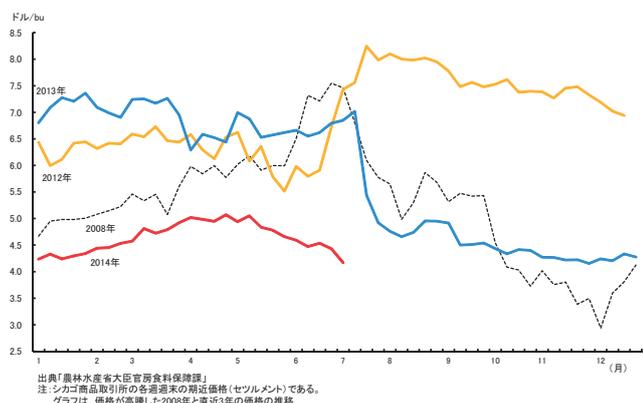
ここ数年の米国は、春先の天候不順や大干ばつ、早霜など何らかの天候の障害があり穀物価格の高騰が続いてきた。それを「地球温暖化」「異常気象」とひとくくりにしてきたが、エルニーニョ現象が発生していないのに米国穀物の作柄がパーフェクトというのも、何らかの「異常」の兆候なのだろうか。

筆者も7月中旬に米国産地を訪問したが、作物の生育は極めて順調で、今後の天候が順調に推移すれば大豊作となり、シカゴ定期の更なる下落が期待される状況である。

■現在までの価格推移

（とうもろこし）

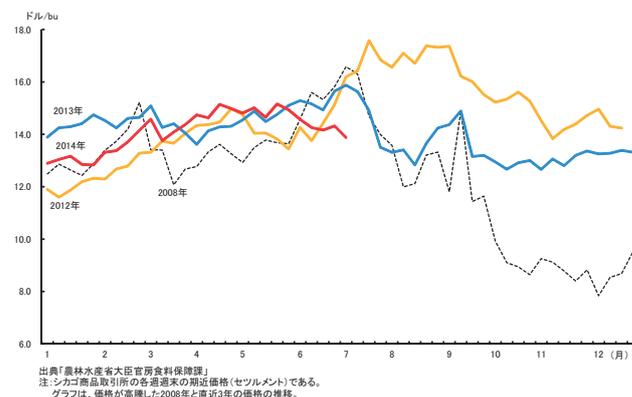
2013年は、4月中旬以降の低温多雨型の天候により作付けが遅延したことから値を上げたが、天候回復と豊作期待により4ドル／ブッシェル台後半まで下落した。その後もエタノールへの使用義務量の引き下げや



豊作が確定的になったことから4ドル／ブッシェル台前半で推移した。

（大豆）

2013年は、とうもろこし同様、春先の作付遅延や旧穀在庫の需給の引き締めにより16ドル／ブッシェル台まで上昇したが、豊作期待から13ドル／ブッシェル台に下落。8月の降雨不足で作柄への影響が懸念され上昇に転じたが、その後の天候の回復や収穫が順調に進捗したことから12～13ドル／ブッシェルで推移した。



■2014年度作付面積、四半期在庫統計

6月30日に米国農務省より2014年度作付面積及び6月1日時点の在庫統計が発表された。

米国のとうもろこしの作付面積は、91.6百万エーカーと、事前予想とほぼ変わらなかったが、大豆は84.8百万エーカーと事前予想の82.1百万エーカーを大きく上回る内容となった。

◎USDA 作付面積（百万ACRES）

	USDA 6月	予想平均	予想レンジ	USDA 3月	USDA 13/14年度
コーン	91.641	91.725	91.0-92.2	91.691	95.365
大豆	84.839	82.154	80.5-84.0	81.493	76.533
小麦	56.474	55.818	54.8-57.0	55.815	56.156
春小麦	12.4	11.86	10.5-12.2	12.009	11.596
デュラム	1.469	1.79	1.694-1.900	1.799	1.47

◎USDA 四半期在庫（百万BU）

	USDA 6/1/14	予想平均	予想レンジ	USDA 3/1/14	USDA 6/1/13
コーン	3,854	3,722	3,046-3,950	7,006	2,766
大豆	405	378	334-440	992	435
小麦	590	598	560-633	1,056	718

一方、とうもろこしの四半期在庫は3,854百万ブッシェルと事前予想に比べ132百万ブッシェル上回り、大豆

も405百万ブッシェルと事前予想を約27百万ブッシェル上回った。

作付面積・四半期在庫統計が総じて弱気な内容となったことから、とうもろこし、大豆ともに相場は大きく下落した。

■穀物の需給見通し（7月米国農務省発表）

（とうもろこし）

2013/14年のとうもろこし需給は、先の四半期在庫統計を受けて飼料需要が下方修正され、期末在庫は1,246百万ブッシェルと前月から100百万ブッシェル増加。米国の期末在庫率は9.21%と前月の8.40%から増加し、需給が緩和する見通しとなっている。世界的にもブラジル、中国の生産量の増加が目立つ。

		12/13		13/14		14/15	
				6月	7月	6月	7月
作付面積		97.2	95.4	95.4	91.7	91.6	91.6
収穫面積		87.4	87.7	87.7	84.3	83.8	83.8
収穫率(%)		89.9%	91.9%	91.9%	91.9%	91.5%	91.5%
単 収		123.4	158.8	158.8	165.3	165.3	165.3
供 給	期初在庫	989	821	821	1,146	1,246	1,246
	生産	10,780	13,925	13,925	13,935	13,860	13,860
	輸入	162	35	35	30	30	30
	供給合計	11,932	14,781	14,781	15,111	15,136	15,136
需 要	飼料・その他	4,333	5,300	5,175	5,250	5,200	5,200
	FSI	6,046	6,435	6,460	6,435	6,435	6,435
	(内/エタノール)	4,648	5,050	5,075	5,050	5,050	5,050
	総国内消費	10,379	11,735	11,635	11,685	11,635	11,635
	輸出	731	1,900	1,900	1,700	1,700	1,700
	需要合計	11,111	13,635	13,535	13,385	13,335	13,335
期末在庫		821	1,146	1,246	1,726	1,801	1,801
在庫率		7.39%	8.40%	9.21%	12.90%	13.51%	13.51%

単位：百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(その他)

2014/15年の新穀も期初在庫の増加と飼料需要の下方修正により、期末在庫率は13.51%と需給は緩和される見通しとなっている。

（大豆）

大豆需給は、需要が調整され期末在庫率は前月の3.68%から4.15%と4%台へ改善する見通し。世界的な生産量は前月比微増であるが、前年よりは増加する見通しとなっている。

		12/13		13/14		14/15	
				6月	7月	6月	7月
作付面積		77.2	76.5	76.5	81.5	84.8	84.8
収穫面積		76.2	75.9	75.9	80.5	84.1	84.1
収穫率(%)		98.7%	99.2%	99.2%	98.8%	99.2%	99.2%
単 収		39.8	43.3	43.3	45.2	45.2	45.2
供 給	期初在庫	169	141	141	125	140	140
	生産	3,034	3,289	3,289	3,635	3,800	3,800
	輸入	36	90	85	15	15	15
	供給合計	3,239	3,519	3,514	3,775	3,955	3,955
需 要	压榨	1,689	1,700	1,725	1,715	1,755	1,755
	輸出	1,320	1,600	1,620	1,625	1,675	1,675
	種子	89	95	99	92	92	92
	その他	1	0	-69	18	19	19
	需要合計	3,099	3,395	3,374	3,450	3,541	3,541
期末在庫		141	125	140	325	415	415
在庫率		4.55%	3.68%	4.15%	9.42%	11.72%	11.72%

単位：百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

2014/15年の新穀は、期初在庫の増加、作付面積及び収穫面積の上方修正により、輸出需要は増加見通しとなっているものの、期末在庫率は11.72%と10%の大口を突破、需給が大幅に改善する見通しとなっている。

■2014年の飼料原料価格・需給の見通し

2014年の米国産とうもろこし、大豆は、春先の作付遅延はあったものの、その後、順調に生育しており、とうもろこしの受粉も順調に進んでいる模様である。また、7月27日現在のクローププログレスも「優 (Excellent)」と「良 (Good)」の比率がとうもろこし75% (前年63%)、大豆が71% (同63%) といずれも良好に推移しており、これらを背景に、シカゴ定期は大幅に下落、およそ4年ぶりにとうもろこし3.5ドル/ブッシェル台、大豆11ドル/ブッシェル台を付けた。

今後、穀物価格の値下がり期待されるところだが、シカゴ定期の極端な下落で農家売りがなくなり、現物価格は大きく下がるとは言い難い状況となっている。

大豆粕等の副原料は、こちらもシカゴ定期の下落に伴い概ね低下傾向にあるが、蛋白原料は依然高値水準となっている。夏の猛暑によりビールや清涼飲料の需要増で、副産物であるグルテンフィードなどの発生量は増加、供給面は問題なさそうである。

しかし、北海道・九州など遠隔地への副原料の移送は、関東・中京地区などから主に内航船を利用しているが、震災復興などの鉄鋼需要等でその内航船の船腹需給が逼迫し、原料輸送に支障をきたしている。2020年の東京オリンピック開催も決定され、今後更なる建築資材等の需要増加により内航船不足は恒常的、構造的な問題となる可能性が高い。

トラック輸送についても、走行距離に関する規制の強化や燃料価格の高騰によりコストアップの要因となっている。

■外国為替

2013年4月の日銀による大規模金融緩和策により、為替相場は1ドル100円を超える円安水準が定着した。2014年に入っても、好調な米国経済指標が発表され、米国金利の上昇期待からドルが買われやすい地合いが続いており、現在102円台で推移している。

以上のように、今後の飼料原料価格は、米国産とうもろこしや大豆が順調に生育し、軟調な相場展開となっていることから低下傾向にある。一方で、物流の問題や円安の定着などにより、価格が大幅に下落することは難しいと思われる。

また、TPP交渉も大詰めを迎え、畜産物価格への影響が懸念されていること、PED (豚流行性下痢) の蔓延による飼料需要の減退など、飼料をめぐる環境は引き続き厳しい状況にある。

そのような環境の中、国産飼料米の利用や食品副産物の有効活用などにより原料調達コストの低減に努め、微力ながら酪農・畜産農家の皆様に貢献していきたいと考えている。